

アスンをもちたく感動させ、彼はマクラレンをロンドンに呼んでイギリス郵政省（GPO）の映画部門のために仕事をさせた。一九三〇年代後半のGPOには、映画の先駆者カベルカンティ、詩人オーデン、作曲家アリテンのような人々がいて活気に満ちた場所だった。グリアスンによれば、「この世界でマクラレンは大いに進歩し、彼ら全ての中で最大の実験家のひとりとなった。」

一九三九年、マクラレンはフリーランスとしてニューヨークに渡った。そこでソロモン・R・グーゲンハイム財団の非具象絵画美術館に迎えられ、いくつかの素描の抽象作品を作った。そしてやがて、カナダにきて新設の国立映画制作庁で忙しい生活を送っていたジョン・グリアスンが、マクラレンをオタワに引っ張ってきた。NFBの目的のひとつは、映画技法の実験にあつたから、マクラレンは自分の思い通りの方法で制作する自由と手段を与えられた——ただ、第二次世界大戦の間は、映画の題材は割り当てられるのが普通だったが。それ以来三十七年の間に、彼はNFBの芸術的名声——数ある公的映画機関の中でもユニークである——を高めることによって、彼にその自由を与えてくれた公立のNFBにそして間接的にカナダ国民に恩を返したのである。

彼の作品の中で、批評家を最も魅了したのは、手製の抽象的なフアンタジー（もしくは超現実主義的な）映画である。それらは、「動く絵画」に非常によく似ており、彼の芸術の最も個人的な表現となっている。マクラレン自身それについてこう言っている——「私は、ちょうど画

家とキャンパスの間に存在するのと同じ密接さと親近感を、僕とフィルムとの間にも保とうとしてきた。」何も書かれていないフィルムに、カメラも使わずに、自分で直接描き込んで色つけすることによつ

て、詩や絵と同じよ
うに個人的な自己表
現としての映画を作

「プリンキティ・プリンク」、「過去のつまらぬ気がかり」、「アイドル・デイー・デイー」、「個と連続」、「めんどりの踊り」)

彼の全作品の中で最も興味をそそる「ブリンキタイ・ブラーク」は、目の網膜に瞬間的に与えられるイメージの効果はどんなものか、また、イメージとイメージの間に間隔を置くと、心はどんなふうになるか、という技術上の

好奇心がきつかけになった。これを探るため、彼は黒のリーダー・フィルムにナイフや針やカミソリの刃で絵を刻み、マクラレンはフィルムをまるで鋼鉄がなぞのように扱ふ」とグラント・マンローは言っている、絵と絵の間には何も描かない黒のリーダー・フィルムををさんだ。この作品は、二羽の奇妙でこつけいな鳥が互いに引張り合いをしているうちに変形して、雨傘、パイナップル、シュエロの

木になり、また互いに混じりあって、最後
に卵を生んでその卵がかえるといった
内容である。これがラブ・ストーリーに
なっていることははっきりしているが、
映像は全くパーソナルで個人的なもので

ある。

純粹の抽象作品、「過去のつまらぬ気がかり（色彩感覚）」では、オスカー・ワイルダーのジャズに乗って、フィルムから直線があふれ、色がフィルムのコマに関係なく自由にふりまかれる。マクラーレンと一緒にこの作品の色付けをしたイブリン・ランバートは、当時を次のように回顧している——「一時、私達は部屋のはこりのせいでひどくイライラしていた

ました。絵の具が乾かないうちに、そこへほこりがついてしまうんです。そのときマクラレンが、ほこり自体が面白い模様を造っているのに気がつきました。そこで私達はそれを利用することにし、もつとはこりをたてようと床をどたばた踏んだり、まだ乾かないフィルムを窓からヒラヒラさせてみたりしました。彼は映写機がフィルムにひどい傷をつけるのを発見すると、このひつきき傷もまた新たな模様を作るのに利用しました。私たちが使った黒い絵の具は乾くとひび割れしたのですが、これもまた別の模様になったのです。」そうして仕上がった作品には、彼らが制作中に味わった楽しさがよく反映している。そこには、色、模様、動きに楽しげに身をまかせている風がある。まるで音楽自身が描いているように思えることもよくある。

「過去のつまらぬ気がかり（色彩感覚）」にしても、音楽から生まれたようなものだが、彼の作品の中で音楽が出発点であった作品は十七作品にものぼる。彼が使ったのはフォーク、ジャズ、ダンス音楽、それに特に映画用に作ったアニメーション（合成）音楽だけである。「クラシックは立派すぎてこわすことができない」という。音と絵の発想が同時に出てくるのが理想だが、実際上は技術的に不可能なので、マクラレンは「点と輪」の中では、彼が作曲して一枚一枚の絵コマの脇のサウンド・トラックにその音をきき込んでいくように工夫した。

芸術家たちの心をとらえたもうひとつのマクラレン作品群は、「パステル技法」を用いて制作されたものである。フラン
ス系カナダのフォークソング音楽を基調

「リズムメティックス」